現代アメリカ禅仏教における一考察

～文化的受容とそのダイナミズムについて～

横浜善光寺育英僧　遠藤　博因

はじめに

アメリカ合衆国において「ＺＥＮ」の三文字は、「ＹＯＧＡ」と並んで東洋の精神を表現する代名詞になるぐらいまで広く膾炙された言葉である。その実アメリカには日本からの禅だけではなく韓国、中国、台湾そしてベトナムからの禅が入り込みそれぞれに修行されている。そんな中で「ゼン」という日本語の表記が代表されるようになったのは、日本からの禅がアジア諸国に先駆けて紹介されたからである。その最初の架け橋となったのが一八九三年にシカゴで開催された「世界宗教者会議」における釈宗演の講演、そして鈴木大拙による一連の翻訳と自らの英文による著作である。その後主に知識層を中心に禅は東洋精神の象徴として学術的に研究され、その広がりを増してゆくことになった。

しかし実際にアメリカにおいて禅が白人の間で大きな関心を惹いたのは、一九六〇年代後半から七〇年代にかけてである。時代は五〇年代

の黄金期を謳歌したのだが、ベトナム戦争による社会の動揺、平和運動、ヒッピームーブメント、等があいまじり振り子現象とも呼ばれるように人々の関心は物資的なものから精神的のものへと大きくシフトしていった。そのような時代背景の元、悟りの体験や理論では把握できない公案といった禅の要素が人々の注目を集めるようになった。その魅力的な側面や人々の動機については、一考に値するがここでは、この時期「ＺＥＮ」は爆発的に人々の関心を惹いた事実を記すまでにとどめたい。そして、この時期日本から渡った僧侶の中で白人修行者を中心にサンガ（ここでは禅を基本とする修行を行う団体、グループ、寺院、禅センター、禅道場をすべて含めてサンガとする）、を確立した方は、曹洞宗系では鈴木俊隆老師、片桐大忍老師、前角博雄老師、臨済宗系では佐々木承周老師、島野老師の名を挙げることができる。そしてこれらの老師の蕉陶を受けた修行者の中から法を嗣ぐ者も出始めた。これがアメリカにおける第二世代の僧侶、そして指導者である。これらのアメリカ人僧は七〇年代後半から八〇年代にかけて師の元を離れ独立してサンガを設立するようになる。現在にいたっては、これらの僧から弟子へと法の伝授が行われる段階にきている。第三世代の禅の指導者たる僧の出現である。もちろんこの僧侶達も第一世代の師の元で修行を始め、十年、二十年という修行期間を経て第二世代の師より法を嗣いでいるケースが今のところ主である。これが現在のアメリカ禅仏教のメインストリームである（この論考では日本からの流れを汲む禅サンガを主に対象として話を進める）。しかし、アメリカ人でありながら言葉の壁を乗り越え、日本の僧堂において修行を終え、再びアメリカに戻り禅の指導にあたっている僧侶もいるということを一言付け加えておく。

ここでは副題にも記したとおり、文化変容とそのダイナミズム、つまり禅の受容を白人社会の文化的価値観と付き合わせてその根付きの度合い、方向性を考察してみたい。さらにはアメリカ禅の現在を知ることがひいては日本の伝統的仏教教団の置かれている状況を客観的に省察し、時代の趨勢に適応するヒントを与えてくれるのではないであろうかと考える次第である。

本論

現代アメリカ禅仏教を表現するのに最もふさわしい三つの特徴、(1)在家修行を基盤とするデモクラシズム、(2)女性指導者、修行者の活躍によりフェミニズム的要素、(3)社会福祉活動を通じての修行と現実社会への統合、をあげそれぞれどのような文化的価値観が背景になっているのかを論じてみたい。

(1)在家修行を基盤としたデモクラシズム

アメリカ禅を語るにおいて在家修行という要素は大変重要な位置を占める。ほとんどのサンガはごく少数の出家の僧侶が指導者的役割を果たし、残りのメンバーやスタッフは在家修行者として禅を行ずるという構図である。この場合、出家僧といってもサンガの規模や個人的事情に応じてまちまちであるが、僧侶として専属にそのサンガで指導者的役割を担っているケースは少なく、ゼン・ティーチャーといえども実際には何らかの生業と両立してゆかなければいけないようなサンガ全体として多く見られる。つまりサンガを構成し運営する実質的基盤は在家修行者達なのである。

その具体的方法が、理事会やメンバーシップによるサンガの運営である。理事会は在家修行者、つまりそのサンガのメンバーから投票等の民主的手段で選ばれる。そしてその理事会の決定により指導陣（堂長）を選任し雇うことをし

ている。この構造はサンガの規模によって少し異なり、大規模な運営をしているサンガほど理事会の権限が大きいようである。例えば、アメリカで最も大規模な運営を行っているサンフランシスコ禅センターでは、三カ所の禅センターを二人の堂長がローテーションを組んで指導に当たり、その下に僧堂でいうところの単頭、維那、知客などのスタッフ陣が雇われる形になっている。またメンバーシップ二五人以下という禅グループは別として、比較的小規模の禅サンガにおいても理事会の制度が設けられているようである。

さらにカウンシル（council）やプラクティス・サークル（practice circle）と呼ばれるグループミーティングを行っているサンガもしばしば見受けられる。指導者、そして在家修行者が車座になってその時の課題について自由に意見を交換し合うというものである。いわば原始仏教教団において行われてきた布薩のようなものである。そこで出てきた意見を智慧としてサンガの運営に個人の修行の向上に反映させようというものである。それぞれのサンガやその時の課題によって進行の仕方や取り決めが少しずつ異なるようであるが、共通していえることが発言の機会が保証され（沈黙も一つの発言の表現）、必ずしも結論にいたる必要はないという具合に進められている。

このようにアメリカの禅サンガにおいては指導者の主導権は比較的小さく、メンバー一人一人がサンガを運営する重要な要素となるような構図が見える。

(2)サンガにおける女性の活躍とフェミニズム

アメリカのサンガがそこに帰属する人々によって民主的に運営されているという現状と同じく、そこに男女における社会的性別、つまりジェンダーによる修行における利益、不利益といっ

たものもほとんど見られないのが現状である。

まずアメリカのサンガではおしなべて男女半々の割合でメンバーが構成されている。この状況をジョン・大道・ローリー師は自身の著書の中で次のように述べている。「全米におけるほとんどの修行道場で四〇％ちかくが女性です。私たちの禅堂ではこの比率はむしろ逆転していて六〇％の女性と四〇％の男性の比率です。」また私自身が一九九七年に七カ所（カリフォルニア、オレゴン、ユタ、コロラド州）の禅サンガ修行者にアンケートをとった結果、寄せられた回答者九〇人の男女比は五〇％対四二・二％であった（無回答七・八％）。さらに女性の指導者の活躍も目立つ。これは全米の禅サンガ（日本の禅の流れをくむサンガ）約一二〇箇所のうち女性が主管を努めるサンガは二六箇所であった。なかなか数字にはでないのであるが、女性の修行者がサンガの運営の重要な部分に加わっていたり、準指導者的役割をはたしているケースがかなり見受けられる。そんな中で仏教史、特に禅における歴史上の尼僧や女性修行者について勉強会を開き、三国歴代祖師があるように女性の系譜をつくりあげたりする指導者もいる。

そして修行体系における重点の移行である。禅サンガのなかでは男性的ともいえる伝統的な坐禅修行（只管打坐・公案）を行じながらも、女性的要素を含んだヴィパサナ・メディテーション（今、ここに意識を集中してゆく瞑想）や心の中で愛情や優しさを他者に振り向けるチベットの瞑想法を採り入れたりしているサンガも増えてきている。

アメリカ仏教全般に対していえるフェミニズム化について、ジャック・コンフィルド師は必ずしも性差別主義や家父長制を排除しようといった動きではない。無所得や悟りへの研鑽を求

めるより、自己とその身体、他者、サンガ、地球との関わり合いや癒しについて修行することにより、深遠なる仏法を探究してゆこうという動きであると述べている。つまり仏法における女性的要素を発掘し、修行してゆくということではないだろうかと私自身考える。

(3)社会福祉活動にみられる友愛主義

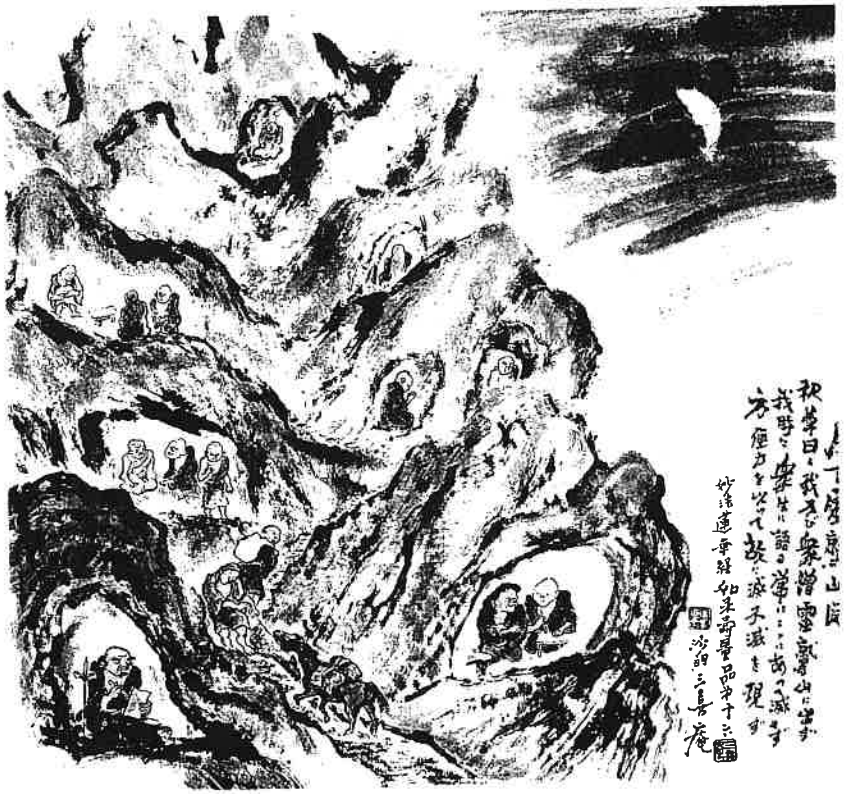
フェミニズムがアメリカ禅の色合いを内側から塗り替えているのに対し、ボランティアリズムや友愛主義という宗教的価値観が禅堂に閉じこめられた修行を現実社会へと引きずり出している様子が見受けられる。まず第一に、ほとんどの禅サンガにおいて地域へのコミュニティー活動への参加が行われていることである。その具体的例をあげると、地域で行われるストリートクリーニング、スープキッチン（ホームレスへの炊き出し）、プリズンプログラム（刑務所における仏教徒の信仰の援助、メディテーションクラスの開催）、フードバンクへの参加、クリスマス時期の老人ホームへの慰問などである。たいがいどのサンガにおいても少なくとも一つや二つはこのような地域社会と接する活動を行っている。

また禅サンガにおける付加的福祉活動が最終的には本業となってしまったケースもある。ニューヨーク禅コミュニティーを主宰していた、ベルナード・徹玄・グラスマン師は、サンガの運営資金調達のためベーカリーを起業し、ホームレスの人々を少しずつ雇い入れることを始めた。それが最終的にはホームレスの人々が必要な福祉援助を得、なおかつ個人が自立できるように職業訓練を行うところまでその活動を発展させていった。

また、末期患者のケアを行うホスピスを運営するサンガや、それと平行して患者の心の部分をサポートするケア・ギバーと呼ばれる人材の

育成を計っているサンガも出始めている。アメリカでは伝統的に病院やホスピスにおいてユダヤ教会、キリスト教会を母体に聖職者、またはそれに準ずる人々が患者の心の部分のサポートを行うチャプレンシー・サービス（Chaplaincy Service）やパストラル・ケア（Pastoral Care）という制度が確立されているのである。このようにアメリカではサンガが何らかの地域の活動に取り組んでいることがあげられ、また坐禅修行からそちらの活動が本業になってゆくサンガのケースもある。アメリカにおける宗教的友愛主義の価値観から鑑みると、禅サンガにおいてその修行や活動形態が菩薩行や慈悲行として福祉活動に向けられることはごく自然な成り行きであると思われる。その実、仏教（小乗、大乗、チベット密教、無宗派）サンガ全体を通じて、近年エンゲージ・プディズムと呼ばれる福祉活動（Social Action）を修行の基本としているサンガの数が急速に増えている。

まとめ

以上アメリカ禅について民主主義、フェミニズム、友愛主義といった文化的価値を取り上げ、自国の土壌に禅が受容されていっている様子を述べさせていただいた。その意味するところはと問えば、アメリカに移植された禅は見事にその土地の人々の精神的、社会的必要性を満たしてきているということではないであろうか。

振り返って日本の伝統的仏教教団は、果たして現実社会に生きる人々の精神的、社会的ニーズを満たしていっているのだろうか。私自身、教化活動として実質的に何も行っていないのに等しい人間がこのような問いを発するのは誠におこがましいのであるが、アメリカでの禅の実状を報告させていただくことで、皆様になにがしかのヒントをお与えできれば幸いであります。